

Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析 —驚くべき発見事実を基に説明仮説を創り出す—

土屋 佑 介[†]、大野 陽 子^{††}
辺 見 英 貴^{††}、田 村 祐 介^{††}

Abductive analysis in Timmermans and Tavory (2012):
Producing new hypothesis based on surprising research evidence

TSUCHIYA Yusuke, OHNO Yoko, HEMMI Hidetaka, TAMURA Yusuke

Abstract

The purpose of this research is to clarify the abductive analysis (Timmermans & Tavory, 2012), which is based on Peirce's concept "abduction". To explain this qualitative method, which is attracted recently, we divided it into three sections: the problem of grounded theory approach and the position of abductive analysis, the component of abductive analysis, and the practice of abductive analysis. As a result, we proposed two contributions. First, abductive analysis helps to link methodology and practice in qualitative research. Second, we can apply abductive analysis to review papers. Finally, we discussed two limitations in Timmermans and Tavory (2012).

キーワード：アブダクション、現象の再訪、異化、代替的なケース化、探求の共同体

Key words：Abduction, Revisiting the Phenomenon, Defamiliarization, Alternative Casing, Community of Inquiry

1. はじめに

調査においては、何らかの先行研究に依拠することが強いられる。先行研究がなければ、何をどのように調査するかを事前に準備することができないからだ。しかし、何らかの先行研究に依拠することで、その先行研究で説明できるデータしか分析しないという危険性

[†] 大阪産業大学経営学部経営学科講師

^{††} 神戸大学大学院経営学研究科博士課程後期課程

草 稿 提 出 日 10月30日

最 終 原 稿 提 出 日 11月30日

がある。後述するが、残念ながら従来のグラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach: GTA) では、この問題に有効な解決策を提示できていない。必要なのは、先行研究を躊躇なく改めることができるデータ分析に必要な推論形式とそれを用いた分析方法である。では、先行研究に依拠しながら、躊躇なく改めることができる推論形式とそれを用いた方法は何か。

本研究の目的は、この課題について、チャールズ・パース (C. Peirce) のアブダクション (abduction) を基にしたデータ分析 (アブダクティブ分析) を提案した Timmermans and Tavory (2012) の議論を整理し、彼らのデータ分析を実践することである¹。この論文は、Google Scholar における引用数が1000件を超えており、近年注目されているため、取り上げる意義があるといえる。

結論を先んじると、アブダクティブ分析は GTA では捨象されたデータを驚くべき発見と捉え、説明しうる仮説の導出まで行う分析であり、既存研究における問題点の発見と説明困難な事実を説明する仮説の創出を可能にする点が有用であることが以下に示されている。

2. グラウンデッド・セオリー・アプローチの問題とアブダクティブ分析の位置づけ²

Timmermans and Tavory (2012, pp. 169-170) は、GTA が研究者に対して、新しい理論を生み出すために既存研究に依拠しないよう戒める一方、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も要求している点を問題視している。

既存研究に依拠しないように戒める点については、例えば「研究対象となる領域に関わる理論と事実に触れた文献を、最初のうちは文字通り無視すること—これこそが効果的な一つの戦略なのである」と明言している (Glaser & Strauss, 1967, p. 37; 邦訳, 51頁)。また「研究者自身がある特定のあらかじめ用意された1つの理論に研究者が入れ込んでしまうと、創造性が失われる」と強く警告している箇所もある (Glaser & Strauss, 1967, p. 46; 邦訳, 66頁)。

一方で彼らは、研究者が備える必要のある理論的な洞察に関する特性として、理論的

¹ 本研究は、Timmermans and Tavory (2012) の整理検討を土屋・大野・辺見・田村が行なったものである。当該論文の忠実な要約ではないのでご注意いただきたい。したがって、本研究を引用することがある場合には「土屋・大野・辺見・田村 (2021) によれば、Timmermans and Tavory (2012) は…」あるいは「Timmermans and Tavory (2012) は、… (土屋・大野・辺見・田村, 2021)。」のように明記されることを推奨する。

² 本節は、土屋・辺見 (2020) に大幅な加筆・修正を加えたものである。

Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析 (土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介)

感受性 (theoretical sensitivity) を指摘する。理論的感受性とは「自己の研究領域を理論的に洞察できる能力」であり、領域に密着したレベルと抽象的なレベルで構成されるカテゴリーと仮説からなる理論装備 (armamentarium) である (Glaser & Strauss, 1967, p. 46; 邦訳, 65頁)。例えば、Glaser と Strauss が提案する「絶えざる比較法 (constant comparative method)」(Glaser & Strauss, 1967, p. 91; 邦訳, 129頁) において重要な理論的サンプリング (特に、何を比較集団とするのか) の基本となるのは、浮上しつつあるカテゴリーの発展を促進する理論的関連性 (theoretical relevance) があることである (Glaser & Strauss, 1967, p. 49; 邦訳, 69-70頁)。なぜなら、グラウンデッド・セオリーであっても、理論と関連付けなければ理論的に重要性かどうかはわからないためである。

したがって、Timmermans and Tavory (2012) は、GTA では読者に相反するアドバイスがなされているため、推論形式から説明仮説の創出に至る一貫した方法論的枠組みが必要だと指摘する。この枠組みが、アブダクティブ分析である。続く第3節では、彼らが展開するアブダクティブ分析について、具体的に説明していこう。

3. アブダクティブ分析の要素

アブダクティブ分析は、研究者が調査中に可能な限り深く広い理論的基盤を持って現場に入り、研究プロセス全体を通して理論的なレパートリーを発展させることを目指す分析のことである (Timmermans & Tavory, 2012, p. 180)。以下では、アブダクティブ分析の要素を推論形式 (3-1.)、理論の役割 (3-2.)、現象の再訪、異化、代替的なケース化という3つで構成される方法の役割 (3-3.)、探求の共同体との関係 (3-4.)、そして研究サイクル (3-5.) に分けて説明していく。

3-1. 3つの推論形式の違い

まず、Timmermans and Tavory (2012, pp. 170-172) は、アブダクションが演繹法と帰納法と異なる推論形式であることを整理している。演繹法の一般的な形式は次のようなものである。

全ての A は B である。

C は A である。

したがって、C は B である。

次に、帰納法の一般的な形式は次のようなものである。

観察された全ての A は C である。

したがって、全ての A は C である。

以上2つの推論形式と異なり、アブダクションの推論形式は次のようなものである。

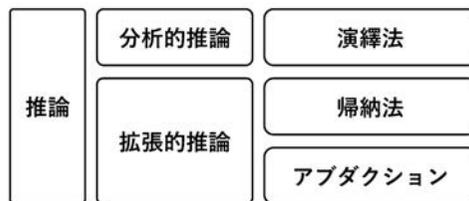
驚くべき事実 C が観察された。

しかし、もし A が真であれば、C は当然起きることである。

したがって、A が真であるという仮説が立てられる。

以上3つの推論を踏まえれば、アブダクションとは、未知の因果関係を推論する形式である。重要なことは、演繹法のように命題 A が事実の前に仮定されることでも、帰納法のように事実が調べれば必ず浮かび上がってくることでもない。むしろ命題 A は、研究者が説明困難な発見事実を説明するために創り出されるということである。

また、以上の3つの推論形式について、パースのアブダクションを詳しく解説している米盛（2007，30頁）は、以下のようにまとめている（図表1.）。



図表1. 3つの推論形式の違い

出所：米盛（2007，30頁）を基に筆者作成

米盛（2007）のまとめによれば、演繹法は分析的推論、帰納法とアブダクションは拡張的推論に該当する。分析的推論とは「推論の内部における前提と結論の論理的な含意関係の分析にのみかかわる」（30頁）推論である。外的な経験的事実の世界には関わらず、「前提の含意内容を分析し解明するために用いられる」推論であるため、「結論は前提の内容以上のことは言明しない、つまり前提の内容を超えた知識の拡張は」（32頁）ない推論となる。一方で拡張的推論とは「経験に基づく推論であり、経験的事実の世界に関する知識や情報を拡張するために用いられる」（33頁）。「結論は前提の内容以上のことを主張する、つまり前提の内容を超えて、前提に含まれていない新しい知識や情報を」（33-34頁）与える推論が拡張的推論となる。

Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析 (土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介)

そして、帰納法とアブダクションでは、拡張的の意味するところが異なると米盛は指摘する。帰納法は「観察データにもとづいて一般化を行う推論」であり、アブダクションは「観察データを説明するための仮説を形成する推論」(84-85頁) という違いである。言い換えれば、観察データと類似の現象を推論するのが帰納法だとすれば、アブダクションは観察データとは違う、直接観察できない何かを仮定するということになる。

以上のような推論形式を整理した上で、次にアブダクティブ分析における理論の役割を説明する。なお、Timmermans and Tavory (2012) では、具体的に GTA との方法の違いを論じられていなかった。そこで、改めて GTA とアブダクティブ分析の違いを論じた Tavory and Timmermans (2019) の説明を加えることで、より具体的な方法を説明していくこととする。

3-2. 理論の役割

先の GTA の問題点(2.)で説明した通り、GTA ではあまり既存研究に依拠しすぎないことが強調されていた。これについて Tavory and Timmermans (2019, p. 534) は、「理論的不可知論を方法論的美徳に変える (turning theoretical agnosticism into a methodological virtue)」狙いがあったと指摘している。

一方で、Timmermans and Tavory (2012) は、理論の役割を説明するにあたって、研究者のポジショナリティ (positionality) とその危険性から説明を始めている。彼らが言及する研究者のポジショナリティとは、研究者がそれまでに経験した訓練や理論的立場、研究目的といったレンズを通して、観察やデータを捉えてしまうということである。彼らは、研究者がポジショナリティに無自覚であると、既成のカテゴリーを用いて、個人生活や職業生活の複雑さを消し去り、研究者の権威を誇示する危険性があり、あらかじめポジショナリティを明確にする必要があると指摘する (p. 173)。

ポジショナリティを明確にする意義は、研究者自身と読者が、調査協力者の経験を深く理解できる点にある。アブダクティブ分析で創出される説明仮説が、特定の事例から因果関係や世界の様相を深く理解可能にする自然的一般化 (cf. 野村, 2017) であるとすれば、観察との適合性と代替的な理論的説明の妥当性に依存するのは必然であるからだ (p. 175)。

3-3. 方法の役割

3-3-1. メモやコーディングの目的

GTA の有名なオープン、軸足 (axial)、選択的という3段階のコーディングの目的は、

生み出した理論の正当化である。「オープン・コーディングでテーマを発見し、軸足コーディングで比較した他の事例で同様のテーマを発見し続け、選択的コーディングでその洞察を磨いていけば、最終的には目的とする一般化にたどり着く」(Tavory & Timmermans, 2019, p. 540) という算段である。

この正当化について、例えば、社会構築主義に基づいてGTAを論じているCharmaz(2014)は、アブダクションに関してStraussと意見が食い違ったことを注釈に記載している。

アブダクションは、研究者が不可解なデータに対して最も妥当な理論的説明を発見したことを確認することに関連している。Anselm(注. Straussのファーストネーム)と私(注. Charmaz)は、グラウンデッド・セオリーにおけるプロセスの意味について意見の相違があった。私は、グラウンデッド・セオリーが統計的手段と関連付けた正当化の方法ではないと主張していたが(中略)Anselmにとっては、グラウンデッド・セオリーは正当化の方法であり、それに変わりなかった。

(Charmaz, 2014, p. 202, footnote 5: 翻訳は筆者らによる)

一方でアブダクティブ分析における方法の目的は、驚くべき発見を見出すためである。この驚くべき発見を見出すために用意されたのが、同じ観察を何度も何度も再訪させること(再訪: revisiting the phenomenon)、および既知の世界を異化すること(異化: defamiliarization)である。この2つは、再訪が時間の経過とともに変化する現象に密着し続けるのに対し、異化は研究者が当然のこととして捉えていた現象から距離を置くという点で、補完関係にある。

まず現象の再訪とは、状況を超えて同じ観察に戻ることができるようにすることである。特に、フィールドノートやメモ書き、およびインタビューなどの記録が、誤った記憶や認知バイアスをチェックするためだけに行われるのではなく、理論を異なる見方から捉える感受性を高めるためになされることを強調している(p. 176)。一方で異化とは、あまりにも当然のこととして、私たちの経験の背景に追いやられていたものに、突然、焦点が当たるようになることである(p. 178)。異化を行うためには、繰り返しになるが、詳細なフィールドノートや正確な書き起こしを行うことが必要である。これによって、論理的な誤りや似ている部分のリスト化、そして詳細な比較が可能になり、調査の時には見過ごしてしまったアイデアを研究者に提供してくれるからである。

この現象の再訪と異化を説明するにあたって、彼らは、現象学的哲学者であるジャン＝

Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析 (土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介)

リュック・マリオンの「飽和 (saturation)」の概念を援用している。飽和とは、時間の経過とともに現象との関係が変化することで生まれるひらめき (重要な洞察) である。例えば、人が美術館を訪れたとしよう。そこで最初にある絵を見て、そのまま他の展示物の中をしばらく歩くうちに、ある部分が同時期に描かれた他の描写方法と似ていることに気づくことがある。これは、人が様々な展示物の中を歩き回る間に最初に見た絵との関係が変化し、新しい方法で物事を捉えようとすることで生じる。

3-3-2. 既存研究への位置づけ

GTA では、研究者が新しい理論を生み出すために、既存研究に依拠しないよう戒める一方、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も求める点に問題があった。Tavory and Timmermans (2019) によれば、この原因は、調査における観察およびそこでのメモやコーディングが、すでに何らかの形で既存研究と関連していることを前提にしているためだと指摘している (p. 539)。

一方アブダクティブ分析では、現象の再訪と異化を行いつつ、異なる概念的・理論的な枠組みで考える代替的なケース化 (alternative casing) を提案している。具体的には、研究者が比較的小さなデータを抜粋し、自分の理論的専門知識に照らして詳細に分析し、データを理解するために可能な限り多くの説明仮説を創出していくことだ。この際、各ケースは様々な既存研究に照らし、現象の異なる側面を抽象化した上で比較できるようにし、他の分野や研究と関連づけることが重要となる。つまり、観察は既存研究と関連しておらず、関連を見出すことが求められるというわけだ。

理論の役割 (3-2.) でも触れたように、研究者の現象に対する理解は、それまでに経験した訓練や理論的立場、研究目的といったレンズ、すなわちポジショナリティの影響を受けている。そのため、ケース化にあたっては、既存研究の範囲内に収まる発見事実も多いだろう。しかしながら、現象の再訪と異化を通じて、既存研究に収まらない驚くべき発見事実を見出す場合も出てくる。実際、慎重にコーディングを行うと、ほとんどの場合、既存研究との関係をさらに定義してあり操作化が必要となったりするのは、質的研究を行ったことのある研究者なら経験するはずだ。

3-4. 探求の共同体との関係

加えて、Timmermans and Tavory (2012) で重要視されているのが、探求の共同体の間で研究を共有することである。基本的に、共同研究関係の構築、他の学者との対話、会議や学会での発表、作業論文の回覧などは、理論的構成の明確化と洗練を促し、理論の生

産のための重要な場だからである。

GTA を基にした研究で多く起きる問題は、調査内容は理解できるが、理論的に「So what?」という問いを向けられやすくなることである。この原因は、観察やメモ、およびコーディングに寄り過ぎたり、逆に既存研究に寄り過ぎたりする結果、既存研究への貢献が見出しにくくなるためである。この問題を抱えると、探求の共同体との対話が困難になり、場合によっては離脱してしまうだろう。

一方で、アブダクティブ分析の場合には、驚くべき発見への説明仮説が必要になる結果、既存研究への貢献が見出しやすくなる。驚くべき発見は既存研究では説明不可能なものであるから、それに代わる説明仮説は必然的に既存研究と対比的な形で説明されることになる。この状態になれば、探求の共同体において、他に可能性のある理論的説明や研究デザインの再検討が必要かを判断しやすくなるだろう。つまり、様々な可能性をオープンにし、場合によっては躊躇なく改めることもアブダクティブ分析を実践するということなのである。

以上のアブダクティブ分析について、GTA と対比的にまとめると以下ようになる（図表2.）。

| | | GTA | アブダクティブ分析 |
|------------|--------------|---|--|
| 理論の役割 | | あまり既存研究に依拠しすぎない (理論的不可知論＝方法論的美徳) | ポジショナリティを自覚し、 複数の既存研究に精通しておく |
| 方法の 役割 | メモやコーディングの目的 | オープン、軸足、選択的という 3段階コーディングを通じて 研究者が生み出した理論を正当化する | 現象の再訪や異化を通じて 驚くべき発見を見出し、 既存研究を問題化する |
| | 既存研究への位置づけ | 理論的感受性を持っておく …観察は何らかの形で既存研究と 関連しているという前提 | 代替的なケース化を通じ、驚くべき 発見と既存研究の関連を検討する …観察は既存研究と 関連していないという前提 |
| 探求の共同体との関係 | | 観察に寄り過ぎたり、既存研究に 寄り過ぎたりする結果、既存研究への 貢献が見出しにくくなる …探求の共同体からの離脱 | 驚くべき発見への説明仮説が 必要となる結果、既存研究への貢献が 見出しやすくなる …探求の共同体との対話 |

図表2. GTA とアブダクティブ分析の対比

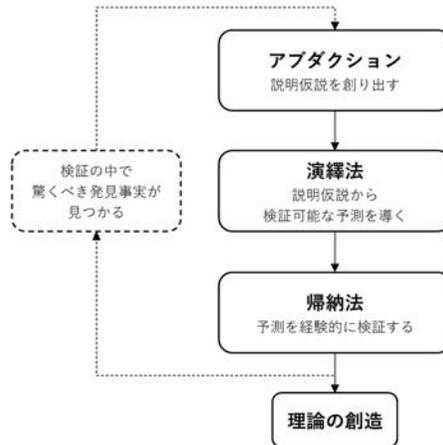
出所：筆者作成

3-5. 研究サイクル

以上のアブダクティブ分析は、以下のような研究サイクルをもつことになる。まず探求の第1段階として、驚くべき発見事実を基に説明仮説と理論を創り出すアブダクションが存在する。次に第2段階として、説明仮説と理論から検証可能な予測を導く演繹法が続き、第3段階として、予測を経験的に検証する帰納法で結ばれる。ただし、検証の中で新たに

Timmermans and Tavorly (2012) のアブダクティブ分析 (土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介)

驚くべき発見事実が見つかる場合もあり、その際は、再度、第1段階に戻るため、研究サイクルとなるのだ (図表3.)。



図表3. アブダクティブな研究サイクル

出所：Timmermans and Tavorly (2012, p. 171) を基に筆者作成

Timmermans and Tavorly (2012) によれば、この研究サイクルは、データと理論を二重に適合させるプロセスだという。1つ目の適合は、驚くべき発見があった場合に、既存研究とデータの相互作用に基づいて予備的な推測を行うことである。この際、既存研究が経験的な現象を完全に説明している場合、研究者は単に既存研究を検証したことになる。

しかし、データを既存研究に照らし合わせてみると、状況の変化や追加的な次元、誤った先入観などが明らかになる可能性が高い。経験的にも理論的にも避けられない異常は、集中的なコーディングやその他の方法論的ステップを経て、データの帰納的な概念化に基づいて暫定的な新しい理論を開発することを必要とする。このことが2つ目の適合である。

4. アブダクティブ分析の実践

本節では、3人の筆者が各自の研究を基に、アブダクティブ分析を実践する。

4-1. 既存研究が見落としていた要因を前景化する

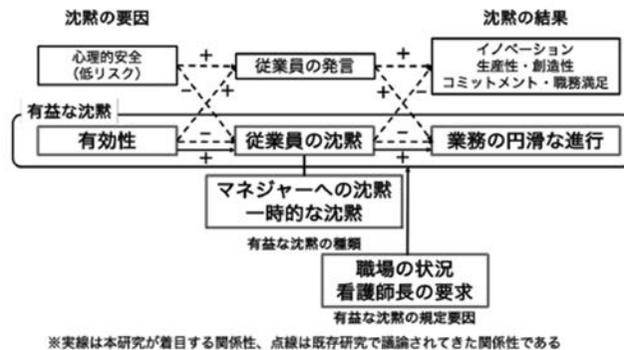
辺見 (2019) は、従業員の沈黙 (silence) の構造について看護師を対象としたインタビュー調査を実施した。既存の沈黙研究では、マネジャーに言いたいことがあるにもかかわらず言えないような社会的・組織的な抑圧による沈黙や日常業務における沈黙が議論され、ネガティブな性質を要するものであった。そのため、マネジャーが従業員の発言

(voice) を促すために、職場の心理的安全 (psychological safety) を高め、発言のリスクを抑えることが重要視されてきた (Mowbray et al., 2015)。

しかし、辺見は調査において、看護師が看護師長 (マネジャー) に対して、あえて沈黙したり、看護師長が看護師に対して沈黙を促したりすることで、業務を円滑に進行させていたという驚くべき発見事実を得た。この2つの発見は、発言リスクを抑えることを重要視してきた既存研究では説明困難であり、何らかの説明仮説を創り出す必要があった。

そこで辺見は、マネジャーへの沈黙と一時的な沈黙で構成される「有益な沈黙」という説明仮説を案出する。マネジャーへの沈黙は、サブマネジャーを介した発言を行うことであり、従業員とマネジャーの2者関係のみに焦点化してきた既存研究と一線を画している。一方で、一時的な沈黙は、看護師長が看護師に沈黙を促すことで、従業員の自力での問題解決を促す意図で行なわれる。発言のリスクを抑えることを重要視してきた既存研究とは、異なるマネジャーの行動を指摘している。

この有益な沈黙を基にすると、職場における業務量と業務の緊急性が、重要な要因として浮かび上がってくる。もし業務量が多い、もしくは業務の緊急性が低い場合には、発言よりも沈黙が行われる。したがって、業務量と業務の緊急性という要因は、発言のタイミングに注目する研究を拓くことにつながるといえる (図表4.)。



図表4. 有益な沈黙のフレームワーク

出所：辺見 (2019, 35頁)

4-2. 調査を通じて、既存研究の限界を前景化する

大野 (2020) は、国際経営研究において、組織と個人をつなぐ現地法人の駐在員の役割 (バウンダリースパニング活動) に注目し、本社と現地法人間の知識移転に関する事例研究を行なった。既存の国際経営研究では、多国籍企業における本社と現地法人間の知識移転が課題となっており、この重要な役割を担う現地法人の駐在員の役割に注目が集まって

いる。

駐在員の主な役割は、現地法人のコントロール、組織文化や知識の現地法人への移転 (Edstrom & Galbraith, 1977)、および本社が保有していない知識の現地法人からの移転 (Harzing et al., 2016) である。そして、駐在員が役割遂行を行う際には、個人的スキル (Barner-Rasmussen et al., 2014) や社会関係資本 (Kostova & Roth, 2003)、モチベーション (Minbaeva & Santangelo, 2018) などの個人レベルの要因が有効であると議論されてきた。

加えて、現地法人の知識移転へのインセンティブとして、知識の希少性が議論されてきた。これは資源依存理論に基づき、知識は希少なほど有用な資源となり、現地法人が本社に対してバーゲニングパワーを得るという議論である。このパワーを得ることで、現地法人は、本社からの様々な支援を他の現地法人よりも優先的に得ることが可能となる。

しかし、大野が調査事例では、駐在員が個人スキルである現地国の言語・文化スキルや社会関係資本を十分に保持していなかったにもかかわらず、本社が保有していない知識を現地法人から移転することが可能となっていた。また、駐在員による現地社員へのマイクロマネジメントや情報の不十分な共有、意思決定の場からの除外によって、知識移転が困難になる事例も確認できた。さらには、たとえ、現地法人で知識が獲得されても、本社の知識受信者との希少性に関する認識の相違によって移転が困難になる事例も確認された。では、以上の驚くべき発見を包括的に説明しうる仮説はどのようなものか。

そこで大野は「知識移転は、駐在員の役割と現地社員や本社の知識受信者との相互関係性に埋め込まれている」という説明仮説を案出する。例えば、駐在員が個人スキルや社会関係資本を十分に保持せずとも、現地社員が補う必要があると認識し、支援行動を行うことで、現地での知識獲得という役割を補完することができる。また、本社の知識受信者が知識の希少性を十分に認識せずとも、駐在員が補う必要があると認識し、希少性の認識を高める行動を行うことで、本社への知識移転という役割を補完することができる。そして、以上の相互関係性が何らかの形で崩れることで、知識移転は困難になってしまう。

この説明仮説によって、資源依存理論に基づいて経済的側面のみを注目したり、個人特性に注目したりした場合、知識の獲得と移転に際した複雑な関係性を見落とすことになってしまうという既存研究の限界が前景化される。したがって、多国籍企業の現地法人から本社への知識移転は、他者を含むその個人が埋め込まれているコンテキストを考慮する、つまり、組織レベルでの活動と個人の行動が絡み合っており、それらを包括的に検証する必要があるということである。

4-3. 文献調査を通じて、既存研究の前提を相対化する

また、アブダクティブ分析の中で論じられているわけではないものの、アブダクションという推論形式は、文献調査による驚くべき発見を基に既存研究が有する前提を相対化して、今後の研究の方向性を示すレビュー論文の執筆にも生かすこともできる。例えば、田村（2020）は、人事評価に関するフィードバックを理論的に再検討することで、既存のフィードバック研究の問題点と今後の研究の方向性を論じている。

既存のフィードバック研究のコアロジックは、今季の成果を被評価者へ返すことで次期の成果を向上させるというものであった。この素朴なアイデアは、Thorndike（1903）の「効果の法則（law of effect）」に基づいている。効果の法則とは、刺激と反応の関係が満足を伴う場合、当該関係の連結が強化される一方、不満足を伴う場合には当該関係の連結が減退されるというものである（Thorndike, 1903）。例えば、評価者が被評価者に今期の成果をSと返すと、被評価者は「今のやり方を継続しよう」という形で、刺激と反応の連結が強化される。逆に、評価者が被評価者に今期の成果をCと返すと、被評価者は「今のやり方はやめよう」という形で、当該関係の連結を減退させる。

しかしながら、田村はフィードバック研究と並行して、マネジメント・コントロールに関する書籍である伊丹（1986）を読み進める中で、組織はフィードバックのタテとヨコの重合構造を有しているという驚くべき発見を得た。タテの重合構造とは、例えば、現場での成果がミドルマネジメントのフィードバックとなり、ミドルマネジメントの成果がトップマネジメントのフィードバックとなることである。一方、ヨコの重合構造とは、第3者から得られたフィードバックが被評価者へのフィードバックとなることである。

なぜ、伊丹（1986）が驚くべき発見になるのかといえ、既存のフィードバック研究が、効果の法則に基づいて業績評価に伴う情報と成果の関係を解明する研究へと矮小化してきたという前提を相対化できたからだ。裏を返せば、業績評価以外の場において被評価者が有形無形に返されているフィードバックは捨象されてきたということである。では、捨象されてきた上記のフィードバックを捉える仮説はどのようなものか。

そこで田村は「フィードバックは組織化に寄与する」という説明仮説を案出する。例えば、昇進スピードは、組織が有する個々人の組織への貢献に対する評価の反映である。だが、加えて、被評価者が有する動機づけが組織にとって望ましいことの反映でもある。つまり、第3者からいかなる動機づけを要求されているかをフィードバックすることで、個々人を組織が望ましい方向へと行動するインセンティブも発生しうる。この説明仮説によって、フィードバック研究は、単なる刺激と反応を超えて、社会的・政治的な側面を有する研究へと拓かれることになる。

5. おわりに

5-1. 貢献

本研究の目的は、パースのアブダクションに基づくアブダクティブ分析を提案した Timmermans and Tavory (2012) の議論の整理と分析の実践であった。本研究の貢献は2点挙げられる。

第1に、アブダクティブ分析は質的研究における方法論と実践を密接に結びつけるのに役立つことを示した点である。アブダクティブ分析は、質的研究者であれば、すでにやっていたことなのかもしれない。しかし、広い理論的基盤から出発し、調査で得たデータを用いて分析を行う質的研究者が、データから新しい理論を生み出す過程を表現する言語を持っていただろうか。それを持たずに GTA を印籠のごとく用いてはいなかったであろうか。

これに対してアブダクティブ分析は、アブダクションという推論形式を基に一貫した驚くべき発見事実から説明仮説を創り出す方法を提供している。そのため、既存研究における問題点の発見および説明困難な事実を説明する仮説の構築の可能性を拓くことができる。そして、質的研究における方法論と実践をより密接に結びつけるのに、役立つだろう。

第2に、アブダクションという推論形式をレビュー論文に応用した点である。質的研究では、時折、既存研究が存在しないことを理由に文献調査を行なわない論文も散見される。だが、金井 (1994) が、「それは研究上の怠慢の正当化にもつながる」(第3章, 注28, 144-145頁) と警告するように、文献調査を行なわない質的研究は存在しえない。

これに対して、アブダクティブ分析は、既存研究の助けを借りながら、説明困難な事実を説明する仮説を創り出すことを要請する。もちろん、アブダクティブ分析は「データと理論を二重に適合させる」研究実践であり、データを新たな文献として捉えることは無理がある。しかしながら、既存研究が見落としていたポイントを明示し、それを補完するにあたって、アブダクションは有効であることは間違いない。

5-2. 注意点

最後に、Timmermans and Tavory (2012) を参考にする際の2つの注意点を限界に代えて説明する。1点目は、アブダクティブ分析は、GTA を全て否定しているわけではない点である。たしかに、GTA は、研究者に対して、新しい理論を生み出すために、既存研究に依拠しないように戒める一方で、広く知れ渡った既存研究を基にした理論的感受性も求めるという矛盾した方針を示していた。しかしながら、代替的なケース化において「絶

えざる比較」を引用しているように、研究者は、新しいデータの抜粋を開発中の概念と比較して、出現した理論に適合すると予想されるケースを検討し、理論がそれらの変動を説明しているかどうかを判断することは必須である。

2点目は、異化を強調しすぎている点である。たしかに、研究者が、予想された説明的枠組みに適合しない結果を取り入れるために十分な柔軟性を保ち、そこから理論を創り出すことは重要である。しかしながら、適合しない結果の発見に重きを置かない興味深い研究の例も多くある。さらにいえば、適合しない結果の発見を重視することは、ケースの分析において重要なパターンや規則性を軽視することにもつながるかもしれない。このさじ加減については、Timmermans and Tavory (2012) や Tavory and Timmermans (2019) も言及していないため、注意が必要だろう。

謝辞

本論文の審査過程で匿名レフェリーの先生より貴重なコメントをいただいた。この場をお借りして、感謝申し上げたい。

参考文献

- Barner-Rasmussen, W., Ehrnrooth, M., Koveshnikov, A., & Mäkelä, K. (2014). Cultural and language skills as resources for boundary spanning within the MNC. *Journal of International Business Studies*, 45 (7), 886-905.
- Charmaz, K. (2014). *Constructing grounded theory 2nd ed.* London, UK: Sage
- Edstrom, A., & Galbraith, J. R. (1977). Transfer of Managers as a Coordination and Control Strategy in Multinational Organizations. *Administrative Science Quarterly*, 22 (2), 248-263.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research.* New York, NY: Aldine. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見 調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 2009年).
- Harzing, A. W., & Pudelko, M. (2016). Do We Need to Distance Ourselves from the Distance Concept? Why Home and Host Country Context Might Matter More Than (Cultural) Distance. *Management International Review*, 56 (1), 1-34.
- 辺見英貴 (2019). 「病院における看護師の有益な沈黙に関する質的研究」『神戸大学大学院経営学研究科大学院生ワーキング・ペーパー・シリーズ』201908a.
- 伊丹敬之 (1986). 『マネジメント・コントロールの理論』岩波書店.
- 田村祐介 (2020). 「組織行動論におけるフィードバックに関する理論的研究」『神戸大学大学院経営学研究科第2論文』.
- 金井壽宏 (1994). 『企業者ネットワークの世界 ボストン近辺の企業者コミュニティの探求』

Timmermans and Tavory (2012) のアブダクティブ分析 (土屋佑介・大野陽子・辺見英貴・田村祐介)

白桃書房.

Kostova, T., & Roth, K. (2003). Social Capital in Multinational Corporations and a Micro-Macro Model of Its Formation. *The Academy of Management Review*, 28 (2), 297-317.

Minbaeva, D., & Santangelo, G. D. (2017). Boundary spanners and intra-MNC knowledge sharing: The roles of controlled motivation and immediate organizational context. *Global Strategy Journal*, 8 (2), 220-241.

Mowbray, P. K., Wilkinson, A., & Tse, H. H. (2015). An integrative review of employee voice: Identifying a common conceptualization and research agenda. *International Journal of Management Reviews*, 17 (3), 382-400.

野村康 (2017). 『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.

大野陽子 (2020). 「多国籍企業の現地法人におけるバウンダリースパニング活動の質的研究」『神戸大学大学院経営学研究科ワーキング・ペーパー・シリーズ』202002a.

Thorndike, E. L. (1903). *Educational Psychology*. Lemcke and Buechner. (安藤文郎・田原博愛訳『教育心理学』培風館, 1932年).

Tavory, I., & Timmermans, S. (2019). Abductive analysis and grounded theory. In Bryant, A., & Charmaz, K. (Eds.), *The SAGE handbook of current developments in grounded theory*. (pp. 532-546), London, UK: Sage.

Timmermans, S., & Tavory, I. (2012). Theory construction in qualitative research: From grounded theory to abductive analysis. *Sociological Theory*, 30 (3), 167-186.

土屋佑介・辺見英貴 (2020). 「ケース・スタディの2つのテンプレート—Eisenhardt (1989)とGioia, Corley and Hamilton (2012)の比較検討—」『大阪産業大学経営論集』21 (2-3), 99-112.

米盛裕二 (2007). 『アブダクション 仮説と発見の論理』勁草書房.